古田肇 県知事×草野満代 フリーアナウンサー

夢のリニア対談

JR東海が国土交通大臣に申請したリニア中央新幹線事業の工事実施計画が認可され、12月には工事に着工。開業に向けていよいよ本格的に動き出す。県内にも大きな変革の風をもたらすリニア。「夢のリニアのまちづくり」というテーマで、古田肇知事と中津川市出身のフリーアナウンサー草野満代さんが、県の取り組みや地域活性化への期待などについて語り合った。

【くさの・みつよ】中津川市(旧恵那郡福岡町)出身。恵那高校理数科、津田塾大学学芸部数学科を卒業後、1989年、NHK入局。ニュースキャスター、紅白歌合戦の総合司会などを務め、97年に退局。フリーとして、TBS「筑紫哲也NEWS23」や長野オリンピックのキャスターなどを務め、現在はテレビ東京「L4you!」、BS-TBS「謎解き!江戸のススメ」などに出演。日本司法支援センター理事、文部科学省日本ユネスコ国内委員会委員などを務める。

【ふるた・はじめ】岐阜市出身。岐阜高校、東京大学法学部卒業後、1971年通商産業省(現経済産業省)入省。フランス国立行政学院留学、JETROニューヨーク産業調査員、羽田、村山内閣首相秘書官、経産省商務流通審議官、外務省経済協力局長などを歴任。2004年9月、経産省を退職。05年1月の知事選で初当選し、現在3期目。全国知事会総務常任委員長、同会地方創生対策本部本部長などを務める。

――リニア中央新幹線開業に対する期待についてひと言。

草野　今までの新幹線が延伸するのと違って、リニア中央新幹線は全く何もないところに新しい物ができる。ゼロから生み出すということはこの50年間にはなく、期待感は圧倒的に大きい。生まれ育った田舎を通ること自体想像できないが、何が生まれるかわからないことほど面白いことはない。これからの私たちに託されているのがうれしい。しかし、今まで(東京から中津川市まで)4時間かかっていたのが約30分になる、と言われてもいまだに実感が湧かない。

知事　東海道新幹線開通から50年、無事故の歴史が日本の新しい時代を切り開いてきた。2020年の東京オリンピックを控え、新しい時代がまた始まるという期待は大きい。約30分という時間距離は県が首都圏の一部になるということ。例えば、企業の本社機能や研究開発機能を岐阜県で果たすことがリニアによって可能になる。

どう活性化、県民の課題

――東濃地域の観光、産業振興への期待は。

草野　まず東濃地域がどういう暮らしを望むのかということ。そしてその土地の暮らしに魅力を感じて訪れる人が増えることが大事。東濃は大きな圏域として動いたことがなく、どういう地域なのかということをそんなに深く考えたことがない。地歌舞伎が盛ん、グリーンツーリズムや魅力的な宿があるなど良いところが点在する。その点をつないで面にしないと一時的にお金を落とすだけになってしまう。

半面、開発を本気でしてきていない地域だからこその面白さを感じる。今まで埋もれていたモノをどう掘り起こすか。地元の人なら遠足などで一度は行く苗木城、東京の高級レストランで出される東濃産の羊肉、雑誌で取り上げられる加子母の民宿など、地元の人のほうがむしろその価値を知らないのでは。リニアの駅ができることで地域の魅力発掘の大きなきっかけになるはず。

知事　リニア岐阜県駅のある東濃を起点に下呂、郡上方面へ南北軸ができ、東西軸上にある中山道などの観光名所とつながる。これで県内に点在していた観光地を一体的な観光エリアとして売り込むことが可能になる。さらに2020年には東海環状自動車道西回りルートが開通し、道路のネットワークが拡大する。これにより、例えば、中国など大陸からの観光客は車の長距離移動に慣れており、広域的な視点での誘客が期待できる。

産業振興戦略としては、大都市に居住する人を対象とした業種、施設をリニア岐阜県駅周辺に誘致していきたい。

また、東海環状自動車道、中央自動車道、リニア中央新幹線が交差する一帯を「東濃クロスエリア」と位置付け、沿線市町と一体となって集中的に企業誘致を図りたい。

駅整備、県の魅力発信へ

――リニア岐阜県駅に対する期待について。

草野　観光拠点としての玄関の役割はおのずと大きくなってくる。駅をどう生かすかは政治家だけでなく、県民一人一人に突き付けられている課題でもある。東海道新幹線の岐阜羽島駅の経験と評価を踏まえ、自分たちの力でどうやってこのエリアを活性化していくのかを真剣に考えることが大切。降りる楽しみのある駅にしたい。

知事　県の東の玄関口として「清流の国ぎふ」をモチーフに、東濃ひのきをはじめとした県産素材を活用するなど、県独自の魅力を発信するランドマークとして整備していきたい。

リニアが東海道新幹線と同様に国民に愛されるかどうかは駅次第。在来線とのアクセスも鍵になる。このため、在来線の特急の停車本数を確保し乗り継ぎを便利にするなど、使い勝手を良くしたい。また、中津川ではリニアのビュースポットを作ろうという動きもあるが、車両を間近で見たいと言う人も多い。リニアの車庫、修理修繕、工場機能を持つ中部総合車両基地が駅の近くに設置されるので、東京～名古屋間で唯一の総合車両基地そのものの見学も駅の魅力の一つになるだろう。

リニアが建設段階となる今、県と全ての市町村が「オール岐阜県」としてまとまり、声を上げ、積極的に提案をしていくことが重要。創造力を大いに発揮して「リニア新時代」のイメージを具体化していきたい。

リニア中央新幹線開業に対する期待や取り組みについて語り合う
古田肇知事(左)と草野満代さん＝東京都千代田区平河町、都道府県会

この対談記事は、平成26年12月14日(日)岐阜新聞朝刊に掲載されたものです。